



夜着（福岡市南区）

民具と生活 —暮らしの中の意匠、暮らしのための設計—

令和7年1月5日(日)～4月13日(日)

企画展示室1～4

「民具」は経済人で文化人でもあった
 渋沢敬三による造語で「一般庶民が、その日常生活の必要から、製作・使用してきた伝承的な器具・造形物の総称」のことです。簡単にいえば、私たちが日常生活を送る上で欠かさず使用してきた用具のことです。

民具は人々が少しでも快適に過ごすために、生活に適した無駄のない形状や設計になるように工夫や改良が施されてきました。また、古くから人々は周辺の自然環境を利用し、身の回りの様々な自然素材を活用して民具を製作してきました。そこには製作者と使用者の経験的な「生活の知恵」が詰まっています。

しかし、高度経済成長期以降、産業が大きく変化し、次々と新しい素材が開発され、生産技術が進化する中で、それまで使用していた民具のほとんどが工業製品へと置き換わってしまいました。それに伴い、私たちの生活は大きく変貌し、現在も次々と生産されるものを受容し、消費し続けています。改めて、民具から生活文化の変遷や暮らしの知恵を学び、私たちの生活のあり方を見つめ直すことが必要なかもしれません。

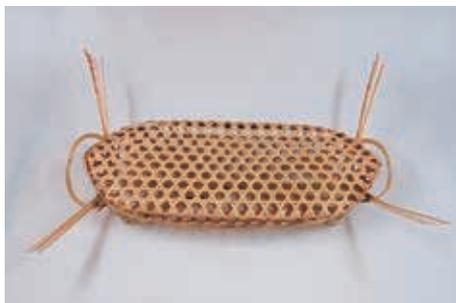
本展では、当館の収蔵品の中から厳選した衣食住などに関する日用雑器を中心に、多種多様な素材や形状の民具を一挙に紹介します。さらに、「はかた伝統工芸館」とコラボレーション展示を行い、古くから製作されている伝統工芸品を展示します。同館が推薦する現代の職人や作家が作り出す新しい造形と、そこに息づく伝統にも注目です。

一 民具の素材と地域性

日本列島は国土の3/4が山地で、2/3が森林に覆われた豊富な自然環境に恵まれています。人々はこのような環境を利用し、身の回りには木、竹、草、土などの自然素材を組み合わせ、加工することで生活に適した民具を製作してきました。例えば、竹や藁を編み、木を組み合わせる雑器を作り、植物から紡いだ繊維を織って衣類などを作りました。

さらに、南北に長く伸びた日本では地域によって気候が異なり、土壌、植生、生態系などの自然環境が異なります。そのため、民具の製作地や使用地によって選択される素材や加工方法が異なり、独自の地域性が表れることがあります。

本章では、木、竹、藁、そのほかの植物で作られている民具を素材ごとに紹介するとともに、多様な加工によって作られた独特な民具を紹介します。



さかなかご 魚籠（地域不明）

お祝いの祝宴に供される鯛などの魚を贈り物として持参するのに使う籠。本体は六つ目に編まれた竹で作られ、左右には竹で作った水引がつけられている。



寿司桶（鹿児島県）

檜材に漆が塗られた円形の寿司桶。酢飯を冷まして混ぜるときに使用するもので、この中で具材を混ぜ込みちらし寿司にすることもできる。



飯ジョウケ（福岡市南区）

炊飯した米を入れておくための容器。主に夏に使用し、風通しの良いところに掛けておくことで米の腐敗を防ぐ。



かにうけ 蟹漁用の釜（福岡県）

川蟹を捕獲するための漁撈具。河川の状況を把握し、蟹が集まりそうな場所に仕掛けて捕獲する。入口には返しが付いていて、中に入ったら逃げ出せない形状になっている。



ナビゲー（沖縄県）
汁物を掬うための汁杓子。ナビゲーは沖縄の方言でおたまや杓子のことを指す。刃物を使って木材を削りだしていく「刳物」の技法で作られている。



ユリ（福岡市東区馬出）
主に寿司桶として使われる曲物の容器。百分の米が入ることからユリ（百合）と呼ばれている。側板は杉板を湯で熱して楕円形に曲げて作られている。



ふなだんす
船筆筒（地域不明）
江戸時代に栄えた廻船で用いられた小型の筆筒。荒々しい航海に耐えられるように多くの鉄金具を使って頑丈に作られた。



やなぎこうり
柳行李（福岡市早良区西新）
コリヤナギを編んで作った箱状の容器である柳行李をトランクに仕立てたもの。衣類や身の回りの品々を運搬するのに用いた。



ほうき
ミゴビキ（石川県）
稲藁から葉や周りの部分を取り除いた穂先を束ねて作った箒。柔らかい掃き心地で、日用づかいの箒で畳の上などを掃くのに用いた。



ごはんむくめ（地域不明）
炊いた飯を移し入れる木製の飯櫃を保温するための入れ物。

二暮らしに合わせた民具
日本の多くの地域では高温多湿の夏を快適に過ごすために家屋は木材などの風通しが良く、調湿に優れた自然素材で造られていました。
夏は風通しが良く快適に過ごせる一方で、断熱効果は薄いため、冬になると屋内は寒気にさらされてしまいます。そのため、冬を過ごす上で「火」が必要不可欠な存在でした。電気やガスなどのインフラが整備されるまでは火が暖をとる、煮炊き調理をする、灯りをとるなどに用いられていました。
屋内で火を扱う場所は主に囲炉裏と竈の二種類があります。囲炉裏は家族が集まる空間の中央に火を焚くところを設け、調理や暖房、灯りなどの機能を兼ねていました。一方、調理に特化した竈は火を囲むように土などで作られたもので、土足で移動する土間の一角などに設けられていました。その上に釜などを載せて調理しました。
調理後、竈や囲炉裏の火は消さずに、残り火で炭に火を起こしていました。その炭火は衣類の皺を伸ばすアイロンや暖をとるための行火などに用いられました。つまり、火は生活全般にかかわる重要なエネルギーで、生活の中心となる存在でした。
本章では、火に関連する民具から、調理や貯蔵用具など、生活の居住環境に合わせて使われていた民具を紹介します。



行火（福岡市博多区祇園町）
手足を温める素焼きの暖房具。中に炭火を入れ、寝床に入れたり、椅子の足元に置いたりして使用する。



火消し壺（福岡市博多区祇園町）
竈や囲炉裏の炭火などを入れ、蓋をして火を消すための壺。



十能（福岡県）
竈や囲炉裏などの灰や炭火などを取り出す道具。シャベル状になっているとともに、底面に足が4つ付いており自立する。



だいしょうのう
台十能（福岡市中央区大名）
炭火を入れて別の場所に移し入れる際に使用する道具。ブリキ製の皿部の底には木台が取り付けられ、床に置けるようになっている。



しおげ
塩筒 (佐賀県武雄市多々良)
食塩を保存するための塩壺。粗塩だと苦汁が出ることもあるため、底に小さな穴が1つ空いている。



つるなべ
足付き弦鍋 (青森県)
煮炊き用の弦鍋。火にかけたり、持ち運んだりするために取っ手が付いている。底面には突起が3つあり自立する。



パン焼き機 (福岡市博多区上呉服町)
七輪の上に乗せて使用するパン焼き機。中にはアルミの皿が上下2枚入っている。



湯たんぽ (地域不明)
円筒形の陶製湯たんぽ。中に熱湯を入れ、布や布袋で包み、布団に入れて足などを温めるのに使う。

三暮らしの中の意匠

民具に施された色彩や模様である意匠は単なる飾りではなく、図案のもととなった自然や動植物から想起される繁栄や長寿、成長などの祈願や意味が込められています。このような祝意を表す鮮やかな色彩や吉祥文様などが施される民具は、冠婚葬祭といったハレの日などの特別なときに用いられます。

一方、日常で使用される民具は機能性が重視されます。例えば、農業や漁業などの肉体労働で着用する労働着は動きやすく、保温性や耐久性に優れている必要があります。そのため、布を藍で染め、重ねた布を手作業で細かく刺し縫いする刺し子を施すことで丈夫になります。さらに、藍染は防虫効果があるといわれています。このような縫いや染織を行う過程で、布地に様々な模様が施され、多様な暮らしのデザインが生まれます。

さらに、衣服を着続けると、やがて布地が擦れて弱くなり、綻んだり切れたりします。少しでも長く着続けるためには、その度ごとに補修をする必要があります。普段から、補修用に着古した衣類を解いた古布や端切れを残しておき、傷んだ部分に布を継ぎ当てたり、接ぎ合わせるなどして補修することで、個性的で独特なデザインになっていきます。

本章では、日常からハレの日まで様々な場面で用いられる衣類や布製品を展示し、その生活の中に息づく意匠を紹介します。



大漁旗 (福岡市西区西浦)
漁船が大漁で帰港する際に船上に掲げる旗。新造船への祝儀として贈られることが多い。船名の他に縁起の良い「闘斗」と「鶴」が描かれ、海をイメージした青色染料が使われている。



ドンザ (福岡市西区西浦)
漁師の仕事着。全体に布地を縫い重ねる刺し子が施され、緻密な幾何学文様が表現されている。



ハギトージン (長崎県対馬市厳原町豆段)
40枚以上の端布を接ぎ合わせて仕立てた鉄砲袖の仕事着。秋から春にかけて山や海仕事などで着用した。



袱紗《宝尽図》(福岡市早良区西新)
宝尽くしはこの上ないめでたさを表す文様。宝船に打出の小槌、宝珠、宝巻などが載っている。



袱紗《海老図》(福岡市博多区)
海老は腰が曲がっていても、跳ねる力が強く「海の翁」などといわれ、長寿の象徴とされる。



袱紗《鶴亀紋図》(福岡市博多区)
鶴亀紋があしらわれた袱紗。袱紗は慶事の際、贈答品に掛けたり包んだりする布を二枚合わせにした四角い布。



麻の葉文様長襦袢 (福岡市)
和装の下着として身に付ける着物。布を縛るなどして染料が染み込まないようにする絞りの技法が使われている。

四 民具と民藝

「民藝」は思想家・柳宗悦らによる造語で「民衆の工藝」の略です。それは無名の職人の手仕事で量産され、価格が安く、さらにはその土地の天然素材で作られた生活に必要な雑器類のことです。

一見、「民具」と似たような言葉ですが、民具はそのものの美醜は関係なく生活用具全般を指すのに対して、民藝は民具の中から「美」を発見したものが対象となります。つまり、それぞれものを捉える眼差しが異なりますが、私たちにとって身近な生活用具が対象であることに変わりはありません。

本章では、まず野間吉夫が収集した九州各地のコレクションを紹介します。野間は昭和15（1940）年に福岡日日新聞社（現・西日本新聞社）に入社し、戦後は夕刊フクニチ新聞社に移りました。そこで野間が手掛けた特集「九州の民芸」を契機に、百貨店・岩田屋で九州民芸展が開催され、九州民芸協会が設立されました。野間は柳宗悦や、陶芸家・河井寛次郎、濱田庄司、バーナードリーチなどと交流を重ね、九州各地の日用雑器を収集し、紹介に尽力しました。

この他に、本市を代表する伝統工芸品の博多織、博多人形、博多曲物、博多張子、博多おきあげ、博多独楽、今宿人形、マルティグラスについて、「はかた伝統工芸館」が推薦する職人や作家の作品とともに紹介します。現代の職人や作家が受け継いできた技術や製作方法などの「匠の技」や、そこに施される意匠などに注目です。



丸デョカ (鹿児島県日置市)
「黒もん」と呼ばれる苗代川焼で作られた土瓶。水毒を消すともいわれ、茶出しや薬煎じ用に使われた。



飛び鉾 文飯鉢 (大分県日田市)
小鹿田焼の飯鉢。表面全体には、ろくろを回しながら尖った銅片をあてて模様をつける飛び鉾の技法が使われている。



白刷毛目皿 (福岡県朝倉郡)
東峰村の小石原で作られた皿。化粧土を掛けてすぐに、ろくろを回転させながら表面に刷毛を当てて模様を付ける。



イッチン文行平 (福岡市南区皿山)
南区皿山で昭和40年頃まで作られていた野間焼の片手鍋。イッチンは筒に粘土などを入れて絞り出し、盛り付ける技法。



虎《博多張子》
和紙を貼り付けて彩色を施した張子の虎。初節供を迎える男児に魔除けや厄除け、成長祈願を込めて、張子の虎を贈る風習がある。



ぼっぼ膳《博多曲物》
松竹梅や鶴亀が泥絵の具で描かれた御膳。博多では3歳になった子どもにポッポ膳を与え、「お膳座り」(真菜の祝い)という祝儀が催される。



仮名手本忠臣蔵《博多人形》
『仮名手本忠臣蔵』の全十一段の場面を表現した博多人形。作者は第3回内国勧業博覧会で褒賞を受賞した讃井清兵衛。



なごや帯《博多織》
九州新幹線鹿児島ルート全線開業を記念して作られた帯。大島紬の十字緋の紋様を表現している。

福岡市博物館 千八四一〇〇〇一
福岡市早良区百道浜三丁目一番一
☎〇九二一八四五〇一一



兜《マルティグラス》
性質の異なる色ガラスを何層にも重ね合わせて作る多重積層ガラスで作った端午の節供の飾り兜。



猿面《今宿人形》
猿田彦神社(福岡市早良区藤崎)で庚申の日に授与される猿面。玄関先などに掛けると火災・盗難除けになるとして信仰を集めている。



夫婦独楽《博多独楽》
夫婦円満、無病息災の願いが込められた飾り独楽。博多独楽は刀や扇子の先で独楽を回す曲芸を起源とする。



羽子板《博多おきあげ》
歌舞伎の演目「三番叟」を表現した押絵羽子板。おきあげは厚紙を様々な形に切り抜き、綿を載せ、絹布などに包んで貼り合わせた押絵細工。